



馬 耳 東 風

話題を集めたNHK朝ドラ“ばけばけ”の小泉八雲(Lafcadio Hearn)の著作『KWAIDAN』は、かつて学生時代に外国語教材で使われていた。その著述の中に「むじな」がある。そのあらすじは、赤坂の紀の国坂での物語だ。さみしい夜道を年をとった商人が坂を急いで上っていくと、ほっそりした上品な女が一人濠端にうずくまって、さめざめと泣いていた。身投げかと思いを貸そうかと足を止めて“お女中”と声をかけた。くると向き直り、袂を下ろして、片手でつりと顔をなでた一見すると、顔には目も鼻も口もなかった。悲鳴を上げて逃げ出した。俗にいう“のっぺらぼう”という妖怪だ。

昔から人を化かす妖怪として知られるいたずら好きなムジナという動物がいる。人を化かす動物としてタヌキやキツネも登場する。漢字で書くと貉むじなまたは貉むじなだ。アナグマの異称だとされる。タヌキを混同して呼ぶ地方もあるそうだ。巣穴は出入り口が複数あり中でつながっている。タヌキと同じで「同じ穴のムジナ」の諺がある。体型もタヌキと混同しやすい。昔の猟師はタヌキ汁といって油ののったムジナを食したそうだ。本物のタヌキ汁は強烈な悪臭で、とても口に合わないと言われている。ムジナのあのずんぐりした体型で、鼻はとがり小さな目は縦の黒模様で囲われ耳も目立たないが、足のつくりは穴掘り用につくられた鋭いがっちりした5本の爪がついている。穴掘りはまさに特技だ。顔の鼻筋は白くまっすぐでイタチ科の動物の中でも、一見もっともな顔立ちで、

いかにも妖怪を連想する。昔話のムジナに化かされる話は、こどもの頃に聞かされたものだ。タヌキと似て薄目を開けてじっとしている。いわゆる狸寝入り(擬死)をするのだ。貯め糞も見かける。里山里地に生息し、どうやら冬眠もするようだ。

関東平野武蔵の國のかつての天領だった江戸時代の検地帳に“むじなおね”の記載がある。秩父の雲取山から脈を引く、現在の加治丘陵に属する場所だ。里人が燃料の柴採りに出かける里山よりいくらか奥山で、北斜面で勾配が急で谷へ降りるのに滑りやすい。湿性地で陰樹のモミヤスギ・ヒノキ・ミズキが自生する。谷にはサワガニやカエルがいる。モミの高い枝元にオオタカの巣が見られた。地面に芽生えたヒノキの苗は間引いて畑に植え付け、植林用に育苗栽培した。里人もこの地へはあまり寄りつかなかったし、山仕事では化かされないように刃物を持つようにといわれていた。一人だととても心細く、早く立ち去りたい寂しい場所だ。首都圏近郊緑地保全地域に指定され、現在は「さとやま自然公園」として活用されている。タヌキ、キツネ、カモシカ、シカ、イノシシ、アナグマ等が生息する。近年里地にシカやイノシシが出没、猟師が駆除対象として“くくりわな”を仕掛けるようになった。かつて“むじなおね”の名を冠した奥山が、野生動物の安住の地であることを祈りながら、保護を終えたアナグマやタヌキがネザサ林床の自然林の斜面をダッシュで駆け下りる姿を見るとホッとするとする。

(柏)